

風 通 し の よ い 廊 下 <sup>(※1)</sup>高普第 5 回卒 長谷川 健二 <sup>(※2)</sup>

## 入学の感激

45 年前、当時の中村一中から相高に入学しました。両校は近かったのに気持ちには大きな変化がありました。やはり、初めて入学試験というものを受けて、無事それにパスしたという喜びと新たな抱負といった感情が身体にみなぎっていました。

ほとんどが男子生徒 <sup>(※3)</sup> で、高校での勉強の心構えや大学進学に向けてのガイダンス等を講堂で聞いた時は、「ヨシ、頑張るゾ！」と張り切りました。中学校とは異なり、クラスでは各地の中学校の出身者が入り混じるので、もの珍しさや地元の優越感のような気分を味わいました。

実際の授業になり、さらに当時すでに大学入試の模擬試験が度々実施され、順位のついた結果が名前とともに廊下に大きく貼り出されていました。

間もなく、それまでは「田舎っぺ」と思って多少軽く見ていた他の中学出身の中にも、自分よりも勉強がよくできる者が何人もいることが分かり、愕然としました。さいわい、自信をなくすこともなく、それからの勉強のライバルとして、また新たな友達として、高校時代の宝になりました。

## 柔道部で

中学時代から始めた柔道は、それまでは警察署の道場で稽古していました。相高に入学すると、さっそく柔道部に入り、大勢の部員と本格的に練習を始めました。とは言っても、当時は専用の道場はなく、窓の戸がない吹きさらしの木造の建物の床に畳を敷いて稽古しました。

その頃は、食糧もまだ少なく、今に比べれば体格も体力も貧弱ではなかったかと思います。しかし、柔道の本質は技であり、「柔よく剛を制す」とか、小さな男が大男を投げ飛ばすことを信じて疑わず、只ひたすら練習に励みました。

県内の対抗試合にも何度か出場しましたが、手ごわい相手が多く、好成績を残すことはできませんでした。しかし、思えば相高時代の 3 年間の柔道の経験が土台になり、現在勤務している大学では柔道部の顧問教官を仰せつかっています。

## 教室で

教室の床も木の板張りの時代でした。毎日、放課後になると自分達で床の掃除をするきまりでした。本来ならば、水洗いしたきれいな雑巾をしぼって手に持ち、掃除当番が一人ひとり丁寧に床を拭くべきものでした。当然、これでは時間がかかり、足腰も疲れます。

3 年生の時の記憶では、実際は掃除当番全員が一致団結して、アツという間に終わりました。その方法は、まず全員の机と椅子を一斉に教室の後方に押し集め、前方の教壇の位置からバケツの水を勢いよく後方に流します。つぎに、床に溜まった水を外箒で後方に掃いていきながら、机と椅子を元に戻します。

最後は、後方に掃き集めた汚水を床板をはがして床下に流し、終了します。これが合法的な掃除の仕方であったかどうかは今もって分かりませんが、翌日はサッパリとした教室で気分よく勉強に打ち込むことができました。

また、教室の後部の壁には真新しい木製の下足棚が立てかけてあり、秋までは完全な形を保っていました。廊下の外側の窓にも戸が入っていなかったため、冬になると寒風が吹き込みました。暖房は教室内の石炭ストーブだけでした。間もなく、くだんの下足棚は栄養状態のよくなかった若者達の手によって上部から次第にストーブの中へと移され、やがて見る影もなくなっていました。

おわりに

現在でも、地球上には似たような状態、もっと貧しい国が沢山あります。当時は、日本が今のように豊かな国になるなどと考えている暇もなく、ただ一生懸命に頑張れば少しずつ良くなっていくという期待で勉学やスポーツに打ち込んでいました。

半世紀近くたった今、当時の情景は楽しかった相高時代の思い出の一コマひとコマとして、諸先生方のお顔や級友達の姿と重なりながら、はっきりと目に浮かんできます。

(※1) 記念誌『相中相高百年史』(1998(平成10)年7月発行)の「思い出の記」より。

(※2) 昭和28(1953)年卒、中村出身。

(※3) 全日制普通科では、この第5回卒から、現在と同様、相馬高等学校に入学、修業年限3年での卒業となった。

また、第5回(昭和28)卒から第9回(昭和32)卒までの5年間、普通科が男女共学となり、毎年女性数名が在籍している。

(転記&※脚注 村山)